

建礼門院右京大夫の源氏物語受容

遠田 晤良

はじめに

平安朝最末期から中世初頭の文化的状況の中で、歌人・文人たちによって源氏物語がどのように迎えられてきたかということは、建久四年六百番歌合判詞に見られる藤原俊成の「源氏見ざる歌よみは遺恨の事也」という言葉が端的に語る。新古今歌壇においては、源氏物語の詞や心を採り優艶な源氏物語の情緒を重ねる本歌取りが盛行するとともに、藤原定家による「物語二百番歌合」の編に見られるように、源氏物語への傾倒は歌壇の風潮となっていた。俊成の揚言は、院政期堀川院歌壇における源氏物語撰取の胎動が、新古今時代にいたって一段と盛行する時代の趨勢を背景にしたものであった。

また、当時の一般の源氏物語読者の受容の様子も「無名草子」の源氏物語批評によってその一端を知ることができ、宇治十帖の続編を意図した「山路の露」や、いわゆる雲隠れ六帖の書き継ぎ、美福門院加賀の源氏供養に

いたるまで、この時期源氏物語は文芸・芸術は勿論のこと、生活の各方面に浸透して、人々の源氏物語に対する深い傾倒を物語っている。

建礼門院右京大夫もまた熱心な源氏物語の愛読者であったろうことは、家集を繕けば容易に首肯されるところである。右京大夫の父藤原伊行は、伊勢物語・源氏物語の研究の端を開き、注釈的研究として知られる「源氏釈」の著者である。「河海抄」に「伊行本」の呼称が見え、伊行が源氏物語の一本を所持していたことが推測される。「河海抄」にいう伊行本はおそらく源氏釈をその本文に自筆で書き入れてあったものか、その転写本をいうのであろう。世尊寺家は行成以来代々書道の家であって、源氏物語の證本を伝えて来たものと考えられる。池田亀鑑氏は、「建礼門院右京大夫と源氏物語の傳流」^{*1}に於いて、「世尊寺家は代々源氏物語の證本たるべきものを傳へたと認められるから、右京大夫が幼いときからこの物語に親しんでいたことは想像に難くない」とされたが、具体的な関連についてはこれまで「建礼門院右京大夫集」の注釈の中でも明らかにされてきたところである。^{*2}さらに、本位田重美氏は源氏物語の続編を意図した「山路の露」が建礼門院右京大夫の手になるものである可能性が高いことを論究された。^{*3}

この稿は、建礼門院右京大夫集におけるいくつかの表現に源氏物語の影響を確認し、源氏物語受容の側面から、家集の中世的性格の一端を明らかにしようとするものである。^{*4}

一 後白河法皇五十賀

後白河法皇五十歳の賀が、法皇御所である法住寺殿において盛大に催されたのは、安元二年（一一七六）三月四

日から六日にかけてのことであった。法皇五十賀は前年から準備がすすめられ、正月二十三日法皇御所での試楽、二月二十一日には皇居での試楽と周到に運ばれて、当日は御子高倉天皇の行幸をはじめ、関白基房、左大臣経宗、右大臣兼実、内大臣師長、右大将重盛以下平家一門の人々等、公卿殿上人の大多数が参加するという、全盛期の平家一門が総力を傾けた盛儀であった。この賀宴において、宮廷の人々に深い感銘を与えたのは、平維盛の青海波の舞姿であった。

平家の専横を最も憎んだであろう九条兼実すらが、「就中、維盛容兒美麗、尤足嘆美」と日記に注した*。それは法皇御所での試楽の日のことであったが、藤原隆房の「安元御賀記」*では六日の舞姿を「青海波こそなをめもあやなりしか」と嘆賞して、次のように記述している。

「青海波の花やかに舞出たるさま。惟盛の朝臣の足ぶみ。袖ふる程。世のけいき。入日の影にもてはやされたる。似る物なく清ら也。おなじ舞なれど。目馴れぬさまなるを。内院を始奉りいみじくめでさせ給ふ。父大将事忌もし給はず。おしのごひ給。ことはりと覚ゆ。片手は源氏の頭の中將ばかりだになければ。中々に人かたはらいたくなんおほえけるとぞ。」

「安元御賀記」と「平家公達草紙」との類似はつとに指摘されているところであるが、「平家公達草紙」も特にこの箇所は全く同じ記述である*。

これらの記述に、「源氏物語」紅葉賀の巻で、光源氏と頭中将とが青海波を舞う場面が色濃く反映していることは、その場面が引き合いに出されているというだけでなく、叙述のはしばしからも、強く読みとれるところである。維盛は今様光源氏であった。

「源氏物語」はまず試楽の場面の光源氏を次のように描写している。^{*8}

源氏の中将は、青海波をぞ舞ひたまひける。片手には大殿の頭の中将、容貌、用意、人にはことなるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり。入りかたの日かげ、さやかにさしたるに、楽の声まさり、ものおもしろきほどに、同じ舞の足踏み、おももち、世に見えぬさまなり。詠などしたまへるは、これや、仏の御迦陵頻伽の声ならむと聞こゆ。おもしろくあはれなるに、帝、涙をのごひたまひ、上達部、親王たちも、みな泣きたまひぬ。（「紅葉賀」）

さらに賀宴当日の青海波の舞姿は、次のようである。

色々に散り交ふ木の葉のなかより、青海波のかかやき出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散り過ぎて、顔のほひにけおされたるこちすれば、御前なる菊を折りて、左大将さしかへたまふ。日暮れかかるほどに、けしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、さるいみじき姿に、菊の色色うつろひ、えならぬをかざして、今日はまたなき手を尽くしたる入綾のほど、そぞろ寒く、この世のこととおぼえず。

後白河法皇五十賀において光源氏の舞姿にたぐえられ、人々の賞賛を一身に集めた維盛は、源平の合戦のなかで、屋島の軍陣を脱出して高野山に登り、出家の後那智の沖で入水して果てる。維盛入水は、平家一族の上に鮮やかに顕現した盛者必衰の理を、人々の心に最も印象的に刻みつける哀話である。

右京大夫にとって維盛は恋人資盛の兄であり、その死は特別な悲しみであった。維盛の死を聞いた折りの痛恨の思いを、

214 春の花の色によそへしおもかげのむなしき波のしたにくちぬる

215 かなしくもかかるうきめをみ熊野の浦わの波に身をしづめける

と詠じ、その折りを回想した詞書には、

「維盛の三位中将、熊野にて身を投げて」とて、人のいひあはれがりし。いづれも、今の世を見聞くにも、げにすぐれたりしなど、思ひ出でらるるあたりなれど、きはことにありがたかりしかたち用意、まことにむかし今見る中に、ためしもなかりしぞかし。さればをりをりには、めでぬ人やはありし。法住寺殿の御賀に、青海波舞ひてのをりなどは、「光源氏のためしも思ひ出らるる」などこそ、人々いひしか。「花のほひもげにけおされぬべく」など、聞えしぞかし。そのおもかげはさることにて、見馴れしあはれ、いづれかといひながら、なほことにおぼゆ。

と記している。「花のほひもげにけおされぬべく」と人々が評したのは、源氏物語花の宴の巻に、右大臣家の藤の宴に招かれた光源氏の美しさを「花の匂もけおされて、なかなかことざましになむ」とあることを受けてのものである。源氏物語紅葉賀と花の宴の場面によそえて維盛の舞姿を賞賛することが、御賀の当時から人々の口の上っていたものであることを知る。

「平家物語」もまた、「此三位中将、桜の花をかざして青海波を舞うて出でられしかば、露に媚びたる花の御姿、風に翻る舞の袖、地をてらし天もかがやくばかりなり。」（巻十、熊野参詣）と青海波の舞に言及することを忘れないほどである。人々の思い出の中に賀宴の舞姿がいかに強烈な印象をとどめていたかを物語っている。

平家の権勢が頂点にあった高倉院時代は、高倉院自身が管弦や和歌の風雅を好み、中宮徳子後宮周辺の平家一族

の風雅人とともに、平家文化圏ともいべき擬似的王朝世界を形成していた。彼らは王朝の物語的情趣の世界をみずからのうえに甦らせようとするのだが、それが擬似的人工的な世界であることを自覚するために、いつそう激しく優艶な王朝的美を憧憬し、その世界に耽溺しようとする。彼らが憧憬する王朝的情趣美の規範が源氏物語にあったことはいうまでもない。久保田淳氏が「彼らは『源氏物語』を、彼らの時代にはもはや頹落した形でしか残り留まっていない王朝の美学を測定する最も確かな尺度と見なしていた^{*}」と指摘するとおりであろう。

康和四年三月の白河法皇の五十賀を先例とした^{*10}、後白河法皇五十賀の法住寺殿における盛儀そのものが王朝的世界の再現であり、維盛の優美な舞姿こそ、彼らの生活感情において憧れてやまない王朝的優艶美の象徴だったのである。右京大夫が人々の賞賛の言葉を借りて哀惜するのも、彼女自身がその文化圏の人であり、同じ憧憬に生きてきたからにはかならない。しかし、その憧憬が冥い輝きを放つのは、もはや取り返すべくもない過去を幻視する感傷などではなく、自己のより所を徹底的にうち砕かれた激しい絶望と恨みに貫かれているからにはかならない。

二 経供養

寿永四年三月二十四日平家一門が壇ノ浦に壊滅し、平資盛も敗戦の中で入水して果てた。

又の年の春ぞ、まことにこの世のほかに聞き果てにし。そのほどのことは、ましてなにとかはいはむ。みなかねて思ひしことなれど、ただほれほれのみおほゆ。あまりにせきやらぬ涙も、かつは見る人もつつましかれば、なにとか人も思ふらめど、「心ちのわびしき」とて、引き被き寝暮らしてのみぞ、心のままに泣き過ぐす。「いかで物をも忘れむ」と思へど、あやにくに面影は身にそひ、言の葉ごとに聞く心ちして、身を

せめてかなしきこと、いひ尽くすべきかたなし。^{*11}

という悲嘆の底で、世に「ためしなき」死であつただけに念仏を唱える余裕も無かつたであろう資盛の死を思い、右京大夫は心を奮い立たせて追善供養をいとなむ。資盛の文殻を集め、それを料紙に漉かせて写経し、またそのまま折り目をのばし裏打ちして、手ずから六地藏を墨書きにした。世間をはばかり心一つに供養をするその行為のなかで、右京大夫自身ふと源氏物語の世界を想起するところがある。

家集ではそれを次のように綴っている。

反故選りいだして、料紙にすかせて、経書き、またさながら打たせて、文字の見ゆるもかはゆければ、うらに物をかくして、手づから地藏六体墨描きに描きまゐらせなど、さまざま心ざしばかり弔ふも、(略)さすが積もりにける反故なれば、おほくて、尊勝陀羅尼、なにくれ、さらぬこともおほく書かせなどするに、「なかなか見じ」と思へど、さすがに見ゆる筆の跡、言の葉ども、かからでだに、昔のあとは涙のかかるならひなるを、目もくれ心も消えつつ、いはむかたなし。そのをり、とありし、かかりし、我がいひしことのおひしらひ、なにかと見ゆるが、かき返すやうにおぼゆれば、ひとつも残さず、みなさやうにしたたむるに、「見るも甲斐なし」とかや、源氏の物語にあること思ひ出らるるも、「なにの心ありて」とつれなくおぼゆ。

228 かなしきのいとどもよほす水茎の跡はなかなか消えねとぞ思ふ
229 かばかりの思ひにたへてつれもなくなほながらふる玉の緒も憂し

自分が死んだら「後の世をばかならず思ひやれ」と言い残した、資盛の遺言を守るのも自分以外にはいないと思ひ詰めて、法然上人の弟子であつた阿証房印西に供養を依頼したのであつた。

故人の消息や反故を漉き返し写経して供養に供する、いわゆる経供養について、池田亀鑑氏は「三代実録・栄花物語・今鏡にも見えてゐて、（略）消息の反古をすき返し、経文をその背後にかいて供養する風習は古くから行はれてゐる」とし、寂蓮法師集、新古今哀傷、月詣和歌集の例を引く。すでに松本寧至氏の指摘するところであるが、^{*12}「十訓抄」に清和天皇崩御ののち、東宮御息所高子が天皇から賜った文を漉き返し薄墨色の色紙に写経したことが記され、「これより反古色紙の経はよにはじまりける」とある。

右京大夫が「『見るも甲斐なしとかや』源氏の物語にあること思ひ出らるる」というのは、「源氏物語」幻の巻に、紫の上亡き後出家を決意した光源氏が、かつて須磨・明石に流寓の際紫の上から送られた消息の文殻を取り出し、その端に「かきつめて見るもかひなしもしほ草おなし雲井の煙とをなれ」と書いて皆焼かせた、とあることをさしている。

右京大夫は源氏物語のその場面を思い起こし、出家の志のために「見るも甲斐なし」と言った光源氏の場合にくらべて、出家の決意もない自分がいったい「何の心ありて（どんな決心があつて）」昔を思い出したのかと情けなく思われるというのである。

源氏物語のそれを思い起こしながら自らに問いかける「なにの心ありて」については、諸家の解釈が分かれている。光源氏の場合は出家の志があつて「見るも甲斐なし」といったのに、自分には出家の決意もないのにと自分自身の不徹底さを責める自責の念と見る上述の解^{*13}に対し、悲嘆の底にありながら源氏物語を思い起こすなど、文学趣味から抜けきれない自分自身への一種の自己嫌悪と見る立場^{*14}である。

「つれなくおぼゆ」という感慨が、反故を整理するに際して源氏物語にあることを思い出したことに対してであ

ることは動かない。「なにの心ありて」というのはその理由を自らいぶかしむのであると考えれば、後者の解釈となる。「つれなし」は「つらし」と関連の深い語であるが、無関心・無表情が支配する対人関係を表す語であり、悲嘆の底で物語の一場面を思い浮かべたりする自分が冷淡で薄情であると感じることになる。

また、反故を整理する自らの行為を源氏の行為に比較して出家の決意もないのに、「なにの心ありて」そうするのか、自分が「つれなく」思われるという解も十分に成り立つ。

しかしながら、右京大夫が死を願ひ、出家の願望をいただくのは資盛の死を聞くよりも前、別離直後にすでに強いものであった。「されど、げに命は限りあるのみにあらず、様かふることだにも心にまかせで、ひとり走りいでなんどは、えせぬままに、さてあらるるが心憂くて」と四圍の監視のなかで自分の意志を貫くことがかなわぬものであった。その思いが、資盛の死に直面してさらに激しくつり、自分の意志を通せぬ不徹底さがはがゆく思われ、自嘲気味に自己を責めるであろうことは、この段の歌に

229 かばかりの思ひにたへてつれもなくなほながらふる玉の緒も憂し

とあることよって十分察せられる。したがって、前者の解釈に立つことが右京大夫の真実に近いと考えられる。

しかし、いづれの解に立つにせよこの内省的なつぶやきは、源氏物語的「もののあはれ」と自己の現実が一体化できない、意識の裂け目を覗かせている点で注意されるのである。

右京大夫が源氏物語を想起するのは、光源氏が反故をしたたむる同じ行為からの連想であるが、それ以上に、紫の上の死に惑乱する光源氏の喪失感と絶望の深さが、自らのそれと共感されるからなのである。しかし、我が身の分身である資盛の、戦乱のなかで無残に断ち切られた命は、「なべての死にはあらず」と繰り返し訴え、幼い頃

から信仰を捧げてきた神仏に対し、「またかくためしなき物を思ふも、いかなるゆゑぞと、神も仏も恨めしくさへなりて」というように、恨みと絶望の深さにおいて、もはや源氏物語的「もののあはれ」の世界にかさねて調和させようとする事のおよそ不可能な体験であった。

にもかかわらず、資盛の死を聞いた右京大夫は「又の年の春ぞ、まことにこの世のほかには聞き果てにし」と回想している。源義経が正式に平家討滅を都に報じたのは四月三日の夜であった(吾妻鏡)。右京大夫が「又の年の春ぞ」というのは資盛が春に死んだことを言うのか、その死を聞いたのが春であるというのか微妙な表現である。三月のうち、つまり春のうちに世人に先んじて、いち早く聞くことができたとは思われない。

しかし、右京大夫にとってその無残な死は、逝く「春」とともに「水の泡となりける」^{*15} ことによつていつそう悲しいのである。月日の経過によつても癒されることのない不条理で過酷な現実さえも、王朝的美意識の範疇でしか表現を探り当てることができないのである。そのもどかしさは、春「水の泡の消ゆる」ように失せた柏木衛門督の死に与えた源氏物語の哀惜の表現をまねぶ気持ちが強いためである。源氏物語の、あるいは王朝的美意識の呪縛は彼女の内面に深く根を下ろしている。

三 資盛との恋

右京大夫と資盛との恋の発端は右京大夫が官廷を退出する治承二年秋以前、おそらくは安元二年か治承元年のことと考えられる^{*16}。その出会いによつて、「なべての人のやうにはあらじ」という強い自制にもかかわらず、「さまざま思ひみだれ」る苦しい恋路に踏み迷うことになる。家集では、その恋の始まりを回想して次のように記している。

なにとなく見聞くごとに心うちやりて過ぐしつ、なべての人のやうにはあらじと思ひしを、あさゆふ、女
どちらのやうにまじりて、みかはす人あまたありし中に、とりわきてとかくいひしを、あるまじきことやと、
人のことを見聞きても思ひしかど、契りとかやはのがれがたくて、思ひのほかには物思はしきことそひて、さ
まざま思ひみだれし頃、里にてはるかに西の方をながめやる、こずゑは夕日のいろしずみてあはれなるに、
またかきくらししぐるるを見るにも、

61 夕日うつるこずゑの色のしぐるるに心もやがてかきくらすかな

資盛との恋が「契りとかやはのがれがたくて」という、宿命的な自覚にもかかわらず、「さまざま思ひみだれ」
心もかきくらすほどに嘆息されるのは、浮薄な恋はすまいと堅く己を持していながら、その自制が脆くも崩れ去つ
たことへの嘆きだけではない。資盛との恋愛と前後して藤原隆信とも恋愛関係を持つようになった事からくる、あ
やになく思ひのためである。資盛との恋は出会いのはじめから複雑な翳りを背負ったものであった。

「よ人よりも色好むと聞く人」隆信との出会いは、「そのかみ、思ひかけぬところにて」と回想されるように、
資盛との出会いに先んじてのものであったと考えられる。よく知られていることだが、「隆信集」には、右京大夫
と交わした一連の贈答歌があり、そのなかに次のような記述がある。

またまたもこの女のもとへたびたび文をやりて、ねんごろにいひわたりしに、返事もいとこまやかにて、た
くもの煙にはいかが思ひたつべきを、あづまとききしかばとて、思ひたえなんもいかがはせんといひたりし
を、きくことや有りけん

670 浦山しいかなる風のなさけにかたくもの煙うちなびくらん

かくいひても猶あかずおぼえて

671 あづまちときくにいとどぞたのまるあぶくま川に逢瀬ありやと

(『新編国歌大観』 「隆信集」 恋五)

右京大夫の返歌は「隆信集」には記されていないが、右京大夫集の歌

140 消えぬべきけぶりの末は浦風に靡きもせずただよふものを

がこの折りの返歌にあたる。

隆信集の歌は右京大夫と資盛との恋の噂を聞いて、隆信が右京大夫の心変わり責めるものであるが、その詞書にある「たくもの煙にはいかが思ひたつべきを、あづまとききしかばとて、思ひたえなんもいかがはせん」というのは、140番の歌と前後して隆信に届けられた右京大夫の文言であろうと考えられる。

この詞書きはこれまでもいくつかの解釈が試みられてきたが、樋口芳麻呂氏の解のように「たくもの煙が浦風になびくように、心弱くほかの男になびこうとは決して思いませんが、あなたがわたくしのことを、あづまに在る(逢坂の関の彼方に在る。すなわち逢うことがむつかしい)と評判に聞いたからと、断念しようとなさるのでしたら、それもやむを得ません(どうぞご随意に)^{*17}」となるのか。

両者の詞書きと歌によって、隆信との出会いが先行しながら、幾ばくも時を経ないうちに、右京大夫が資盛と恋におち、それが隆信の知るところとなったものであることがわかる。隆信集による限り、右京大夫の返事には無意識にせよ、なお拒絶し切れない媚態が覗いている。しかし、資盛に身を許したことが「思ひのほかなる」事とみずからいぶかしむほどに不意のことであり、その恋の行く末に確信のもてない迷いと動揺のなかで、隆信に対する文

が綴られたのであろう。この贈答からいくばくもなく隆信とも許す仲となった。

資盛との恋は「契りとかやはのがれがたくて」「さきの世の契りにまくるならひ」「うき契りにもひかれぬる」「のがれざりける世々の契り」と繰り返し記されるように、宿命の自覚に貫かれたものであった。それは、非業の死を遂げた愛する者への鎮魂の思いが、いつそうその自覚を強固なものにするのであるが、二人の男性の愛をほとんど同時に受け入れてしまうことになったあやにくさは、強い羞恥と悲嘆を伴わずにいられなかった。

はじめつかたは、なべてあることもおぼえず、いみじう物のつつましくて、あさゆふ見かはすかたへの人々も、まして男たちも、知られなばいかにとのみかなしくおぼえしかば、手習ひにせられしは、

132 散らすなよ散らさばいかがつらからむしのぶの山にしのお言の葉

133 恋路にはまよひいらじと思ひしをうき契りにもひかれぬるかな

134 いくよしもあらじと思ふかたにのみなぐさむれどもなほぞかなしき

と、恋の発端を語るには異常なほどの懊悩と羞恥の感情が記されるのは、こうした事情によると考えられるのである。

その恋の初めの頃、「何事もへだてなく」と約束した人に、

130 夏衣ひとへにたのむかひもなくへだてけりとは思はざらなむ

と、約束に背いて秘密を抱くことになった弁解をつぶやくのだが、その詞書きに、

思ひのほかにも身の思ひそひてのち、さすがに、かくこそともまた聞えにくきを、いかに聞き給ふらむとおぼえしかば、

と記す。資盛との恋に懊惱する身となったことを、「思ひのほか、身に思ひそひて」とおぼろげな言葉で記すのは、すでに引いた最初の告白に「契りとかやはのがれがたくて、思ひのほか、物思はしきことそひて、さまざま思ひみだれし頃」と同趣の表現であり、資盛との出会いを「契り」と自覚する意識と分ちがたく結びついている。同時にそれは、資盛と隆信との愛をほとんど同時に受け入れることになった、理解を超えたわが心の複雑な翳りを宿しながら詠嘆し、羞恥する心の翳を覗かせた表現である。そして、資盛との恋の発端を「思ひのほか」の出来事とし、その恋の懊惱を「身の思ひ添ひて」と内省するのは、やはり源氏物語と深く関わることもある。

四 身の思ひ添ふ

世間一般の人のような生き方はすまい、恋など決してすべきではないと思ってきた自意識の強い右京大夫にとって、資盛との出会いが「契りとかやはのがれがたくて」と自覚されようとも、それを物語るには、所詮「なべての人」でしかなかった女としての悔恨と羞恥を伴わずに語ることはできない。ましてその恋が、隆信の存在によって説明しがたい複雑さを抱えているのであればなおさら翳りを帯びざるをえない。

「迷い入りし恋路くやしき」恋の初めを「思ひのほか、物思はしきことそひて」といい、「思ひのほか、身に思ひそひて」と繰り返すおぼろげな物言いは、そうした複雑な翳りを内包した表現である。

そして、その恋が平凡なものでなかったように、必ずしもありふれた告白の言葉ではない。

物思いにとられる身となったことを「思ひ」が身に「添ふ」とする表現は、一見ありふれたもののようにであり、特別注意を引くことはないが、調べてみると意外に用例は少ない。「添ふ」（自四）とは元来ある物に他の物また

は同種の物が加わるところに原義があり、「付け加わる、増す」という意味で用いられる。その意味では元来あった悩みに「もの思わしきこと」「身の思ひ」がさらに添加されることをいうのであり、二人の男性の愛情の狭間に苦悩した右京大夫自身を正確に表現しているものと云うことができよう。

光源氏との出会いによって物思う身を嘆く女性が多く描かれる「源氏物語」にあつても、物思いが身に「添ふ」と表現されるのは、わずか三例にすぎない。

一例は、夕顔の遺児玉鬘を、養い親の立場にありながら執心する光源氏の心理的葛藤を表すものであり、「いみじうなつかしう、手つきのつぶつぶと肥えたまへる、身なり肌つきのこまやかにうつくしげなるに、なかなかなるもの思ひ添ふ心地したま(ひ)て」(「胡蝶」)とある。

光源氏のわりなき恋心が、玉鬘の魅惑的な容姿を目の前にしてますます募ることを云うにすぎないのだが、次の例は、女三の宮と契った柏木衛門督が、その秘密を源氏に知られた畏怖と懊惱から一途に死を願う柏木自身の述懐である。秘密を知らぬ親の嘆きを前に、「強ひてかけ離れなん命かひなく、罪重かるべきことを思ふ心は心として、また、あながちに、惜しみとどめまほしき身かは。(略) つひに、なほ世に立ちまふべくもおぼえぬもの思ひの一方ならず身に添ひにたるは、我より外に誰かはつらき、心づからもてそなひつるにこそあめれ」(「柏木」と語る。

柏木が女三の宮に捧げた一途な思慕が、己の想念の中に美化した虚像にみちびかれたものであつたとしても、その恋の迷路に踏み迷う身となつたことを「もの思ひの一方ならず身に添ひにたる」と述懐するのである。その秘密を源氏に知られた彼の悔恨と畏怖がひたすらに命を削り、自壊してゆくことは、周知のごとくである。

恋愛の場面において、深い悩みを抱える身となったことを、単に「もの思ふ身」とか、「もの思ひ」が「つく」あるいは「抱く・抱える」「絶えぬ」というのではなく、「もの思ひ」が「添ふ」という表現が選ばれるのは、元来抱かれていた悩みに新たな悩みが加わるという「添ふ」の原義がもつニュアンスが働いているのであり、錯雑した人間関係のなかでの恋愛と、そのための懊悩を前提として用いられる表現ではなからうか。

右京大夫の表現が特に注目されるのは、かの六条御息所が病あつい死の床で光源氏に託す遺言との関わりにおいてである。御息所は「心細くてとまりたまはむを、必ず事にふれて数まへきこえたまへ」と、自分の死後の娘齋宮の絶望的な不幸を案じ、源氏に後事を託すのだが、長い懇願に続けて、

「うき身を抓みはべるにも、女は思ひのほかにても、思ひを添ふるものになむはべりければ、いかでさる方をもて離れて見たてまつらむと思うたまふる」（「漣標」）

と、わが娘齋宮に注ぐ源氏の好色の情動を封じつつ、男女の関係を離れた「さる方をもて離れて」の後見役を懇願するのである。

六条御息所は「わが生涯の不幸に娘の未然の不安を重ねている^{*18}」のであるが、「女は思ひのほかにもの思ひを添ふるもの」という認識には、自らの女としての悲痛な体験が色濃く滲んでいる。「十六にて故宮に参りたまひて、二十にて後れたてまつりたまふ。三十にてぞ、今日また九重を見たまひける」と野宮で源氏に別れを告げた御息所は、報いられぬ情熱や嫉妬、誇りと屈辱の鬱屈のため精神の平衡を失った、おぞましい我が身を伊勢の地に朽ちさせることを願った。

伊勢下向から六年後、御代がわりとなり齋宮の任を解かれた娘とともに都に帰ったのであるが、病床から、娘に

は男女の事に心を勞することのない独身の生涯を貫かせたいとする母の願いは、源氏を痛撃するだけでなく、御息所の心的葛藤を我が事として見つめてきた読者を激しく打つ力がある。

光源氏と六条御息所との出会いは、物語の背後におぼろに潜められているが、わずかにその女文字の筆跡の見事に惹かれたことがほのめかされている。能書の家に生まれた右京大夫が六条御息所に強い関心を寄せることはむしろ自然であるのだが、年少の資盛との不安定な恋愛のなかで、そして隆信との錯雑した恋愛関係のなかで、自らの心をつめ、六条御息所の悲痛な心情を己に重ねるような読みを繰り返したことであろうことは想像に難くない。資盛との恋の体験を「思ひのほかにも身の思ひ添ひて」、「思ひのほかにも思はしきこと添ひて」と陰影深く刻みつける右京大夫の表現には、六条御息所の心情の深さを己に重ねる自己確認のありようを明らかに読みとることができる。

右京大夫が家集編纂の事情を、「わが目ひとつに見む」ためであると慎ましく語るが、それはすべてが不確かな現実にあつて、悲しみから逃げず、悲しみを悲しみとして引き受けることによつて確かなものを求めようとする不逞な意志を隠している。戦火のなかに愛する者を失った後、右京大夫は絶望の淵に生き耐えながら、資盛と共有した時間をたぐり寄せ、心底の闇を見つめる。その闇の中に生きる勇氣の灯を見出そうとする彼女にとって、源氏物語の六条御息所はこれまでとは違った貌を見せたに違いない。

五 むすび

建礼門院右京大夫が、家集の枠を超え長文の詞書きを添えて形象化しようとするものは、動乱の世に愛する者、

自己の分身を失ったみずからの痛恨の軌跡であり、「夢とも幻とも」いうべき言葉すら知らぬ狂おしい絶望と虚無である。その抒情は「なべて世のはかなきことをかなしとはかかる夢みぬ人やいひけむ」とする激しい恨みにつらぬかれている。しかし、その恨みの基底には現実を超えた世界に愛する者の面影を永遠につなぎとめようとする純一な意志があり、祈りがある。

平家全盛時の文化的状況の中で擬似的王朝文化の再現が幻視され、源氏物語憧憬の機運が胚胎していたことは先に述べたところであり、右京大夫集においても十分に確かめられるところである。しかし、平家文化圏の中で自己を形成し、華やかな文化を体験享受した人々が、一転して平家滅亡の過酷な現実を目の当たりにして、なお王朝文化を憧憬し、王朝美学の規範として源氏物語の世界に熱い関心を寄せるのは、前代の風の単純な継承ではあり得ない。もはやすべてのものが深刻な矛盾をさらけ出してしまった時代をこの目で確かめた者が、己の体験を源氏物語的世界と一元的に調和させるなどということは不可能な時代である。時代の風には単なる過去への憧憬とは裏腹の激しい絶望と虚無が潜んでいる。その絶望と虚無のなかから新古今的余情妖艶の美学が開花するにはさらに強靱な意志の力が必要である。

右京大夫が、源氏物語に沈潜し、源氏物語的美意識に呪縛されながら、資盛の面影をわが命の終わるまでひたすらいだきつづけるという、強靱な意志の力によって自らの世界を守るところに、時代の変革期を生きた歌人の姿があり、源氏物語受容の中世的なものへの傾斜を見いだすことができるのである。

- * 1 『源氏物語大成』（普及版）第十二冊 研究編 中央公論社
- * 2 本位田重美著『標注建礼門院右京大夫集全釈』（初版 昭和二五年四月、改訂版 昭和四年 九年九月、武蔵野書院）。久保田淳著『建礼門院右京大夫集評釈』（『国文学』昭和四三年一〇月―四六年三月 学燈社）。村井順著『建礼門院右京大夫集評解』（昭和四六年四月 有精堂）。糸賀きみ江校注 新潮日本古典集成『建礼門院右京大夫集』（昭和五四年七月 新潮社）。藤平春男・福田秀一共著鑑賞日本の古典『建礼門院右京大夫集・とはすがたり』（昭和五六年二月尚学図書）
- * 3 本位田重美・神津真佐子編『源氏物語外篇 山路の露 第一類本・大二類本』（昭和五五年三月 新典社）
- * 4 源氏物語の享受の問題には、今井源衛「享受の問題」（『源氏物語必携』昭和四二年学燈社）、中野幸一「源氏物語の享受」（『王朝文学の研究』昭和45年角川書店）、寺本直彦著『源氏物語享受史論考 正編 続編』（昭和四五年、昭和五九 風間書房）『源氏物語の享受史』（『源氏物語講座』八 昭和四七年、有精堂）の諸氏をはじめとして数多くの論考があるが、特に平家文化圏における源氏物語享受の問題を論じた久保田淳「平家文化の中の『源氏物語』―『安元御賀記』と『高倉院昇霞記』―」に多くの示唆を得た。
- * 5 『玉葉』安元二年正月二十三日の条。
- * 6 群書類従本「安元御賀記」による。
- * 7 久松潜一・久保田淳校注『建礼門院右京大夫集 付平家公達草紙』（一九七八年三月 岩波文庫）によって本文を示せば次のごとくである。
- 青海波の花やかに舞ひ出でたるさま、惟盛朝臣の足踏み袖振る程、世のけいき、入日の かげにもてはやされたるかたち、似る物なくきよらなり。同じ舞なれど目なれぬさまなる を、内、院を始めたてまつり、いみじくめでさせ給ふ父おとゞこと思みえし給はず、おしのごひ給ふ、ことわりと見ゆ。見る人涙を流す。片手は源氏の頭中将ばかりだになければ、中へにかたはらいたくなん覚えけるとぞ。
- * 8 「源氏物語」本文引用は石田穰二・清水好子校注新潮日本古典集成『源氏物語』一一八による。以下同じ。
- * 9 久保田淳氏「平家文化の中の『源氏物語』―『安元御賀記』と『高倉院昇霞記』―」（『文学』vol. 五〇・一九八二・七 岩波書店）

- * 10 『玉葉』 承安五年七月四日の条。
- * 11 「建礼門院右京大夫集」 本文は、糸賀きみ江校注新潮日本古典集成『建礼門院右京大夫集』（昭和五四年七月、新潮社）による。
- * 12 松本寧至著『追憶に生きる建礼門院右京大夫』 昭和六三年九月 新典社
- * 13 本位田重美氏『標注建礼門院右京大夫集全釈』・藤平春男・福田秀一共著『建礼門院右京大夫集・とはすがたり』鑑賞日本の古典12など。
- * 14 前掲、久保田淳氏「建礼門院右京大夫集評釈」『国文学』・糸賀きみ江校注「建礼門院右京大夫集」など。
- * 15 資盛一周忌の忌日をいうかと考えられる本文に、「弥生の二十日余りの頃、はかなかりし人の水の泡となりける日なれば」とある。P 一三七
- * 16 拙稿「建礼門院右京大夫集における藤原隆信との贈答歌」犬飼廉編『古典和歌論叢』（昭和六三年三月、明治書院）
- * 17 樋口芳麻呂「隆信と右京大夫の恋」（『愛知教育大学国語国文学報』三〇、昭和五一年一月）
- * 18 日本古典文学全集『源氏物語』2「滯標」の巻頭注。